

創世記8章－9章17節 「新たな始まり」

1A 休む箱舟 1－14

2A いけにえによる宥め 15－22

3A 新しい統治 1－7

4A ノア契約 8－17

本文

創世記8章を開いてください。私たちはノアの時代の洪水の記録を読んでいます。私たちが前回学んだことを思い出してみましょう。事の発端はもちろん、アダムが罪を犯したことです。そしてその遺伝子が息子に受け継がれて、兄息子カインがアベルを殺しました。そのカインが悔い改めることなく彷徨い出て、その子孫は暴力が特徴となりました。しかし、アベルもカインもいなくなった後で主が、アダムとエバにセツを与えてくださり、それから彼らは主の御名で祈るようになりました。主が御霊によって、ご自身を求めて恵みの中に生きる者たちと、そうではなく肉の思うままに生きる者たちとに分けられたのです。

それから、暴虐に満ちるようになりました。主はこれを残念に思い、水によって世界を裁くことをお決めになります。しかし、セツの子孫であるノア、その名前は「休む」とか「慰める」という意味が含まれています。彼によって、罪によって苦労が増したこの世界に慰めを与えてくれるだろうとノアの父は祈ったのです。彼はノアにメシヤ、世界の救いを求めたのでした。

それでノアがその悪い時代に生きていました。彼は、「主の恵みに見いだされた(6:8 参照)」とあります。彼が何か正しいことをするのではなく、神の恵みによって救われた人、それゆえ正しい心を持つことができた人でした。そして、水の裁きに対して救いとなる箱舟を作りなさいと命じられます。ノアはその声を聞いて、神を信じてそれに従いました。その箱舟に、6章14節に、「やに」とありますが、それが「贖罪」の意味があります。水が箱舟の中に入ってこないようにすることが、贖罪の元々の意味です。私たちが神に裁かれることのないように、主ご自身が私たちを守ってくださるということでもあります。

そして、彼は百年ぐらい経ってから、箱舟の中に入りなさいと命じられます。彼は神を恐れて、その言われることを信じていました。目で見ることがなくても、語られたことを信じました。これが、信仰による義であります。「ヘブル 11:7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。」私たちが、自分の拠り所として神の約束を信じているでしょうか？このことによって義と認められます。

それから箱舟に入って、主がその戸を閉じられて、四十日、四十夜雨が降ります。当時は、天において大きな水の層がありました。そして地下にも巨大な地下水がありました。それが避けて、全地を水で覆ったのです。これが神の、人の罪に対する裁きになります。私たち人類は、全ての人々が罪を犯したので、神の裁きに服さなければいけません。

これが、7章までの大まかな流れでした。そして8章に入ります。8章は、神がその裁きを全うされたので、その休みに入り、新たな命ある世界を広げられる場面に入ります。それはあたかも、神が全世界に対する罪をキリストの上に置いて、その裁きを全うされたので新しい命を与えることに似ています。ローマ人への手紙 8章に、新しい命の歩みが書いてあります。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。(1-2節)」私たちが、キリストにある新しい命の原則の中に歩んでいるか、本日、確かめてみましょう。

1A 休む箱舟 1-14

8:1 神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。それで、神が地の上に風を吹き過ぎさせると、水は引き始めた。

神が、水を引き始めさせる、そのきっかけとなっているのが、「心を留められた」という言葉です。大洪水があり、世界中が水に覆われている中で箱舟だけがその表面を浮かんでいます。しかし神はノアとそこにいる動物が生き残るようにさせる、という契約を結ばれていました。その契約を神は決して忘れておらず、それを実行に移されるということです。

人の心には絶えず、「自分が拒まれているかもしれない」あるいは「見捨てられているかもしれない」という痛々しい感情があります。日曜礼拝では詩篇を学んでいますが、詩篇には数多くその思いが表現されています。「詩篇 10:1 主よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか。苦しみのときに、なぜ、身を隠されるのですか。」ですから、主はその人々のはかなさをよく知っておられ、「思い出す」という言葉をもって慰めておられます。例えば、イスラエルの民がエジプトで苦しんでいた時に、「2:24 神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。」とあります。これは忘れてしまったから思い起こしたということではなく、約束を覚えておられ、確かにそれを実行するという意味です。

興味深いことは、ノアと共にセットで、動物たちも主が心に留めておられることです。かつて主はアダムに、全ての物を造られてこれらをあなたに支配させるという約束をされました。アダムが被造物に対して主(あるじ)として神が定められたのと同じように、神は新たにノアに対して動物と共に新たな契約を結んでくださいます。

8:2 また、大いなる水の源と天の水門が閉ざされ、天からの大雨が、とどめられた。8:3 そして、

水は、しだいに地から引いていった。水は百五十日の終わりに減り始め、8:4 箱舟は、第七の月の十七日に、アララテの山の上にとどまった。8:5 水は第十の月まで、ますます減り続け、第十の月の一日に、山々の頂が現われた。

大雨は四十日間降りましたが、水が引くのは百五十日後であります。神が風を吹き始める時と、大雨が止む時に時間の差があったからでしょう。そして、アララテ山に留まったとありますが、アララテは、アルメニアとトルコとロシアをまたぐ山脈です。

そして、ここ「山の上にとどまった」の「留まる」は「休む」と同じ言葉であり、ノアという名前と語源が同じものが使われています。そうです、神が罪に対するご自分の怒りの全てを満たされたので、それ以上、裁かれることはない、ゆえに休むと宣言されているようなものです。これまで荒れ狂う海の上を浮かんでいた箱舟がアララテ山に留まるのは、主が全ての怒りをキリストの上に置き、それで主が、「わが霊をあなたの御手にゆだねます。」と言われて休まれたのと同じです。罪に対する神の怒りがすべて、この方の上で満たされたので、キリストにあって休みに入ることができます。

8:6 四十日の終わりになって、ノアは、自分の造った箱舟の窓を開き、8:7 鳥を放った。するとそれは、水が地からかわききるまで、出たり、戻ったりしていた。8:8 また、彼は水が地の面から引いたかどうかを見るために、鳩を彼のもとから放った。8:9 鳩は、その足を休める場所が見あたらなかったの、箱舟の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあつたからである。彼は手を差し伸べて鳩を捕え、箱舟の自分のところに入れた。8:10 それからなお七日待つて、再び鳩を箱舟から放った。8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ。むしり取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地から引いたのを知った。8:12 それからなお、七日待つて、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。

四十日の終わりになって、これら鳥を放つということをノアは行いました。彼は神が約束を守ってくださることを期待して、その様子確かめるために鳥を放ちました。主がこれからなされること、新しい世界は何なのだろうかとワクワクしていたことであろうと思います。

興味深いことに、「鳥」をノアは放っています。鳥は水が乾ききるまで、出たり、入ったりしていました。考えられることは、鳥は肉食でもありますから、大洪水によって浮かびかがってきた動物の死体を食べていたのではないかと思います。ですから、出ていってはその死体の上で食べて、それで戻ってくるような日々を過ごしていたのではないかと思います。そしてもう一匹、鳩はそんなことをしないので、水が引いていないと戻ってきました。そして創世記に七日待つと。オリーブの若葉をくちばしに加えていて、さらに七日待つともう帰ってきませんでした。地面が現われてきたことを表していました。

鳥と鳩については、創世記がモーセによって書かれていることに注目する必要があります。猛禽

類は、レビ記 11 章にしたがうと汚れた動物に分類されます。そして鳩については、いけにえに用いられる動物の一つでもあります。鳥は汚れており、鳩は主の前で清いものとして捧げることができるものです。この時代はまだ律法の与えられる前ですが、それでもここにはそうした意味合いがあることでしょう。

鳥が登場するので有名な話は、エリヤに対して肉を運んできた鳥のことです。「1列王 17:6 幾羽かの鳥が、朝になると彼のところにパンと肉とを運んで来、また、夕方になるとパンと肉とを運んで来た。彼はその川から水を飲んだ。」エリヤは神が北イスラエルを飢饉をもって裁かれることを宣言して、そして自分自身が生き残るために主が鳥を用いて、肉とパンを与えるということなさいました。したがって、罪に対する神の裁きというものを鳥は表しています。

しかし鳩は、どうでしょうか？ イエス様がバプテスマを受けられた後に、聖霊が鳩のように下ってきて、この方の上に降りてこられました(マタイ 4:16)。エリヤの霊によって来たバプテスマのヨハネは、悔い改めなければ神の怒りが来ると説きましたが、イエス様の聖霊による宣教の働きはその後の慰め、罪の赦しとそこからの解放を宣言しています。

8:13 ノアの生涯の第六百一年の第一の月の一日になって、水は地上からかわき始めた。ノアが、箱舟のおおいを取り去って、ながめると、見よ、地の面は、かわいていた。8:14 第二の月の二十七日、地はかわききった。

大雨が降り始めたて一年十日後に地面が全て乾きました。ノアは、一年間、辛抱強く神を待ち続けました。

2A いけにえによる宥め 15-22

そして新しい世界が始まります。

8:15 そこで、神はノアに告げて仰せられた。8:16 「あなたは、あなたの妻と、あなたの息子たちと、息子たちの妻といっしょに箱舟から出なさい。8:17 あなたといっしょにいるすべての肉なるものの生き物、すなわち鳥や家畜や地をはうすべてのものを、あなたといっしょに連れ出しなさい。それらが地に群がり、地の上で生子、そしてふえるようにしなさい。」8:18 そこで、ノアは、息子たちや彼の妻や、息子たちの妻といっしょに外に出た。8:19 すべての獣、すべてのはうもの、すべての鳥、すべて地の上を動くものは、おのおのその種類にしたがって、箱舟から出て来た。

主がノアに命じられた、三つ目の命令です。一つは、「箱舟を造りなさい」でありました。次に、「箱舟に入りなさい」でありました。そして今、「箱舟から出なさい」であります。ここでノアが、御言葉に従順になり、出てきていることに注目してください。彼は待つ、という辛抱のいることを行なっていました。彼は水が引いたかどうかを確かめるために、鳩を飛ばしました。そして箱舟の天井を

開けて、一年後には水が引いたのを見ました。けれども、主に命じられる時まで彼は箱舟から出ていきませんでした。主が命じられるまで、彼は先んじて思いこみで出て行くことはありません。

ノアには、さまざまな霊性が備わっています。彼は神の恵みに知られた人でありました。そして、神と共に歩む人でした。つまり、いつも神との交わりを欠かすことのない人でした。さらに神のことはをそのまま信じる人でした。そして忍耐して信じる人でした。百年経っても信じていました。そして今見たのは、辛抱強く待つということです。

そしてここで主が、「**それらが地に群がり、地の上で生子、そしてふえるようにしなさい。**」と動物に対して命じておられます。これは主が初めに語られた祝福の命令そのものです。主は新しい世界を始めておられます。ですから、主は古い世界を水によって裁かれましたが、そこから新しい命を始められました。これこそが水のバプテスマを表していると使徒ペテロは話しました。「**1ペテロ 3:20-21 昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。バプテスマは肉体の汚れを取り除くものではなく、正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるものです。**」

私たちはキリストにあって、古い自分が裁かれました。キリストがその罪の罰を受けてくださったので、私たちはキリストにあって裁かれました。しかし、キリストが甦られたので、私たちもその命にあって新しくされたのです。そのことを表しているのが水のバプテスマです。「**2コリント 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。**」

8:20 ノアは、主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。

ノアが行ったこと、新世界が広がっている中で彼が初めに行ったことは何でしょうか？私は昔、子供たちにノアのことを教えていた時に、「みんなだったら、何をするかな？全く新しい所で、初めに何をしたいかな？」ノアは、祭壇を築いたのです。これが神と人との関係を築く土台になるものでした。つまり、神を礼拝したのです。私たちはいかがでしょうか？主によって罪が赦されました。新しい命が与えられました。そこで溢れてくる感謝と喜びを、私たちは全ての物を捧げることによって応答するのです。ノアは、礼拝する、感謝するということを忘れていない人であり、私たちも習うべき行いです。

動物をいけにえとして捧げることが、なぜそんなに大切なのか？アダムが罪を犯し、主がしてくださったのは皮の着物です。私たちが罪を犯して、それで死ななければいけません。それを主が

身代わりに動物が死ぬようにされたのです。その神の方法を受け入れたのは、アダムとエバの間に生まれたアベルです。彼は羊の初子を主の前に全焼のいけにえとして捧げました。私たちは、カルバリーチャペル日本カンファレンスで、最後に聖餐にあずかりましたね。主イエスの裂かれた肉、流された血を覚えるためのものです。このことを基本的にノアは行ったのです。

8:21 主は、そのなだめのかおりをかかれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。8:22 地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。」

これは、主が人に対する関わりの根本的転換です。「人の心の思い計ることは、初めから悪」というのは、元々、主が水の裁きを行なわれた理由となっていました。「6:5-6 主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」これで水によって消し去ろうと決められたのに、ここではその真逆です。初めから悪であるから、決して打ち滅ぼすことはしないとされているのです。これは、どういうことでしょうか？もし彼らが悪を行なっているということで裁きを行なうのであれば、何度も何度も裁かなければいけないから、ということです。しかし、神はそうではなく、恵みによって彼らに接することをお決めになられたのです。人が神に立ち返るのは、神がノアに示されたように、ご自分の慈しみによるのみだということでもあります。

主がそのようにお決めになることができたのは、「そのなだめのかおりをかかれ」た、というところにあります。主が、このいけにえを快く受け入れられたということです。主がこの犠牲をもって、人が初めから悪に傾くその罪を根こそぎに取り除き、それで恵みをもって臨まれることをお決めになられたのでした。したがって、もはや私たちの行いによらず、この犠牲であるキリストを信じる信仰によって義と認められるように決められたのです。「ローマ 3:23-25 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。」

いかがでしょうか、私たちは神の恵みの契約の証拠を、日々見えています。ここで、「地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。」と命じられていますが、何千年と、毎日、主はこの約束を守っておられることを示しています。それと同じように、神の恵みはとこしえに続くのです。私たちが主を仰ぎ見る時に、この方が自分の過ちや罪に対して怒る方だと思っておられるでしょうか？それとも、その怒りをすでにキリストによって満たされたから、自分はその憐れみにすがり、その偽善の生活から抜けだすことを選び取るでしょうか？

3A 新しい統治 1-7

そして主は、ノアに対してアダムに続く新たな祝福命令を与えられます。

9:1 それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。9:2 野の獣、空の鳥、..地の上を動くすべてのもの..それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。9:3 生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。9:4 しかし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。

主は新たに祝福される時に、残念ながら完全な刷新ではなかったことがここで伺うことができます。「野の獣、空の鳥、..地の上を動くすべてのもの..それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。」とあります。なぜ恐れおののくのか、それは人間の食べ物になりえるからです。つまり、これまで生きているものはそのような恐怖ではなく、ただ人に委ねられ支配を受けることのできる存在ですが、動物が人の管理を離れて恐れから逃げていく、という問題をここで見ることとなります。

しかし、主は一つの禁止事項を設けられました。「肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。」であります。医学的にもそうですが、血の中に人を生かす酸素など大事なものが入っています。そして主の関係の中で霊的に、血を流すということはその人の命そのものを取るということを意味しています。ですから、イエス様はその肉体から血を流されたということは、罪の赦しのために非常に大切なのです。その命を尊重するために、命というのは神にしか属していない、つまり神聖なものであることを知るために、主は血のあるまま食べてはならないと命じられています。そしてこれが、モーセの律法の中に組み込まれました。

実は、初代教会においてユダヤ人がいる手前、異邦人の信者にも血で絞め殺したものを食べてはならないと定めています。「使徒 15:19-20 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。」主は、口に入れるものによって人は汚れたものとされないということを教えの中で語られました。そして、それが使徒たちの教えでした。「1テモテ 4:3-5 しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は一つありません。神のことばと祈りによって、聖められるからです。」しかし、初代教会においてユダヤ人の人たちが、血を食べている人々を見たらつまずく、ということがあるので、このことだけは避けるようにしようという「愛の律法」に基づいて決めました。

9:5 わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。9:6 人の血

を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。9:7 あなたがたは生めよ。ふえよ。地に群がり、地にふえよ。」

主は、大洪水を起こした原因となった罪に取り組みられています。カインがアベルを殺した罪です。これが原因で、すべての暴虐が世界にはびこりました。そこで死に対しては死という報復の原理をもって、その悪がはびこるのを抑えられます。これがモーセの律法に組み込まれ、「殺してはならない」という戒めを与え、それに違反した者には死の対価をもって償う制度を与えられました。

そして「人の血を流す者は、人によって、血を流される。」とあります。神が人に、殺人者を死刑にする権威を与えられました。これが、人が人を治める政府の原型であります。どの国に行っても、そこに平和と秩序があるのは政府があるからです。もしその基本が崩れると、今の内戦になっているリビアのように暴虐と流血と無秩序でいっぱいになるのです。ローマ 13 章で、パウロが教会の人々にこう教えました。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(1 節)」悪のない完全な状態は、この世において期待することはできません。イエス・キリストがこの地に戻ってこられて、神の国を立てられる時を待たなければいけません。けれども、それまでの間、神は政府や国の権威を通して、悪を抑制しておられます。もちろん、政府自体が腐敗して、悪がはびこることがあります。けれども、全くない無政府状態よりは優るのです。

4A ノア契約 8-17

9:8 神はノアと、彼といっしょにいる息子たちに告げて仰せられた。9:9 「さあ、わたしはわたしの契約を立てよう。あなたがたと、そしてあなたがたの後の子孫と。9:10 また、あなたがたといっしょにいるすべての生き物と。鳥、家畜、それにあなたがたといっしょにいるすべての野の獣、箱舟から出て来たすべてのもの、地のすべての生き物と。9:11 わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」

主が古い世界を滅ぼし、いけにえによって新たな命ある秩序を与えてくださり、そしてそれを契約によって守ってくださいます。「契約」というヘブル語「ベリットברית」は、元々は「間を断ち切る」という意味があります。後に神がアブラハムと契約を結ばれる時に、山羊や羊、鳩を真っ二つに切って、その間を主が通られる場面がありますが(創世 15 章)、それが契約を結ぶことでした。つまり、子の契約を破ったならば、破った者はこのように真っ二つになるという意味です。言い換えれば、「真剣な合意」であります。途中で破棄するようなものではなく、決して変更されることのない約束事です。

ここで契約を結ばれているのは主ご自身です。ノアとその息子たち、また動物に対して結ばれております。一方的に結ばれているので、これを守る責任は一方的に神にあります。つまり、神はこ

これらの約束事を必ず守られるということです。そして神は人と関わりを持つときに、今後、契約を結ばれることによって関わってくださいます。後にアブラハムと契約を結ばれます。子孫が祝福されるという約束です。それから、モーセによって神が契約を結ばれます。主の律法を守り行うなら、祝福された民の民になるというものです。それから散らされた民が、約束の地に戻ってくると主が約束された契約が、申命記 29-30 章にあります。そして、ダビデと結ばれた契約があります、それは彼の世継ぎの子が永遠の御国を受け継ぐ、というものです。

最後に、新しい契約があります。これはモーセと結んだ古い契約をイスラエルはことごとく破った。しかし、神が彼らの心に律法を置いて、つまり御霊によって心を新しくして、それで彼らの神となり、神は彼らをご自分の民とするというものです。さらに、罪の永遠の赦しも与えられます。私たちは今、この新しい契約の中にいるのです。カンファレンスでは聖霊の働きを求める教えがあり、祈りが捧げられました。これは新しい契約の中での特徴なのです。

そしてノアとの契約の内容は、「もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」ということです。この約束を主は今も守っておられます。主はここで単なる「洪水」のことを話しておられません、ノアの時に引き起こされた、全地を覆う大洪水のことです。主はこれまでその約束を守ってくださいました。けれども主は次に、火による裁きを行われます。そして世界を一新して、神の国を地上に立てられます。

9:12 さらに神は仰せられた。「わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。9:13 わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。9:14 わたしが地の上に雲を起すとき、虹が雲の中に現われる。9:15 わたしは、わたしとあなたがたの間、およびすべて肉なる生き物との間の、わたしの契約を思い出すから、大水は、すべての肉なるものを滅ぼす大洪水とは決してならない。9:16 虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」

主は契約を立てられる時に、印を与えられました。私たちも契約を結ぶ時に印鑑という印を押しますが、契約を締結し、その確認をするのが印です。それが虹です。虹はもちろん、雨が降った後、日が差すので見ることもできるものです。したがって、大洪水ではなくその前に雨がやみ、日が差したことを示す虹をもって、確かに主が契約を守っておられることを確認することができます。事実、これまで神は、虹という印をもってこの地上に対する契約を守ってこられました。

先ほどお話しした契約について、ざっと眺めると印があります。それは、アブラハムとの契約では割礼、モーセとの契約では安息日、そしてダビデとの契約では「息子」が印となります。そしてエレミヤを通しての新しい契約は、イエス様の弟子たちに対する言葉です。「これは、あなたがたのために流される新しい契約の血です」というもの。血そのものが、新しい契約の印なのです。私た

ちが、イエス様の流された血を見る時に、それが確かに私たちの罪が永遠に赦されたことを確認するものとして、御霊が注がれていることを確認するものとして与えられています。

9:17 こうして神はノアに仰せられた。「これが、わたしと、地上のすべての肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

こうしたノアとの間に契約が結ばれました。いかがでしょうか、私たちの古い人がすでに死んでいるという、水のバプテスマを自分のものとしているのでしょうか？私たちの歩みは常に、罪に対して死んでいる、キリストと共に死んだのだ。そして、新しくキリストが甦られたその命によって生きているのだ、ちょうどノアが箱舟から出てきた時のように出てきたのだとみなしているでしょうか。